

よりあいつうしん

号外



食べる、出す、眠る

よりあい代表

村瀬 孝生

2021年が始まりました。新型コロナウイルスの猛威は留まるどころを知らません。今のところ宅老所をはじめ、特養も感染から逃れております。

感染対策とはいえ、ボランティアさんやいつも気にかけてくださる地域のみなさんと顔を合わせることができず残念です。みなさんお元気で過ごしましょうか。

日々の介護は歩みを止めることができません。地震で揺れようと、台風に吹かれようと、職員はお年寄りの生活を支えます。このような職業を「エッセンシャルワーカー」というのだと新型コロナウイルスの流行によって初めて知りました。

エッセンシャルとは「必要不可欠」「本質的な」という意味とのこと。医療・福祉従業者に関わらず、ライフラインを支える人たちが該当します。

確かに僕たちの仕事は「食べる」「出す(排泄)」「眠る」といった生命活動の本質に深く関わっています。まさに必要不可欠で休むことのできない営みです。

「コロナ禍にあつて、大変ですね」とお声掛けをいただきます。確かにお年寄りに感

染が広がるのではと冷や冷やしています。けれど、コロナによって仕事の在り方が変わることはありませんでした。

「食べる」「出す」「眠る」。濃厚に接触しながら、相も変わらない命の営みに沿い続けています。さらにその営みにある生理的な「快」が僕たちを安定に導いていることを実感します。

毎日のように繰り返されている「食べる」「出す」「眠る」ですが、同じものは一つとしてありません。

「食事にお誘いするとき『僕に合わせて立ちますよ』とお願ひしたら『合わせるのは君の仕事だ』とたしなめられました。

「便の切れが悪くて何度も拭き直していたら『いつまで、そこをいじくりまわすとね』とおっしゃいました。

「昨日も眠れていないので今日こそはぐっすり・・・と思ったら、昨夜以上にお元気で『まだ起きているの？早く寝なさい』と気を使ってくれました・・・」。

朝の申し送りでは職員とお年寄りのやり取りが語られます。ひとつ、ひとつが再現できない繰り返しです。その積み重ねを通じて、職員たちはお年寄りと関係を深めていきます。その結実が「生活」なのだ改めて感じる今日この頃です。

本年も変わらぬご支援をお願いいたします。す。

「今」をお年寄りと手づかみする

特別養護老人ホーム

よりあいの森

安永 周平

2020年は、全世界が「コロナウイルス」に翻弄された1年でした。

よりあいの森も例外なく、その影響を受けました。お年寄りを取り巻く環境は瞬間に変化していききました。外に出る機会が制限され、ご家族、地域の方々、ボランティアさんとの交流は見事に分断されてしまいました。

職員達は、日々の感染対策に余念なく、自分自身が媒介者とならないように細心の注意を払いながら過ごしました。そんな、何もかも一変した暮らしの中ではありましたが、お年寄り達は、必要以上に恐れることはなく、実に堂々と現実を受け止めていたように思います。

私達は、そんなお年寄り達の凛とした姿に本当に助けられました。そして、変に怖がって委縮してしまい、制限ばかりの中で過ごしてもらってはいけなないと思いましたが、基本的な感染対策をしつつ、「今」を大事に暮らしていけるような支援に努めました。

夏には、お年寄り職員だけの納涼祭を開催し、御神輿を担ぎ、みんなで手持ち花火を楽しみました。プランターでキュウリやトマト、なす、枝豆などを一緒に育て、収穫祭にてみんなで美味しく食べました。敬老会も例年通り開催し、催し物を楽しみました。秋には、九重「夢」大吊橋や、星野村まで出かけ、紅葉を楽しみました。

そして、若い女性職員は、99歳のおじいちゃんに、人生初のスターバックスコーヒーを味わってもらいたいという願いを叶えました。

当たり前のことですが、それぞれの方が、自分達と同じ価値のある「今」という時間を生きています。自分達は、幸いに「今」何を優先するのか取捨選択しながら暮らしていきますが、お年寄り達は「今」を私たちに委ねながら暮らしています。

だからこそ、支援者として、お年寄り達が大事にしたい「今」を守り、共に作っていく必要性を改めて感じた1年となりました。コロナウイルスが今後どのように落ち着いていくのか：先行きは今のところ見えていません。けれども、適切な感染予防対策に努めながら、2021年も出来る限り伸び伸びと、楽しく暮らしていきたいです。

それでは、今年もよりあいの森のお年寄り、職員一同、どうぞよろしくお願ひいたします。



絶妙なバランスで茶碗を置く
お年寄り

変わったこと、変わらなかったこと

宅老所よりあい

末吉 倫子

「なんでみんなマスクをしとるの？」

職員が皆マスクをしている。いつもと違う様子にお年寄りから何度も言われた言葉です。

2020年は新型コロナウイルスの流行で世の中が一変しました。

重症化のリスクが高いお年寄りに感染させてはならないと、職員たちは通勤からプライベートの過ごし方まで、見えないウイルスにピリピリしていました。私たちの仕事は『3密』を避けるどころか、密にならざるを得ません。そんな中でどうやって支援していけるのだろうか。マスク、手洗い、消毒、検温、試行錯誤しながら運営を続けています。

コロナ禍で大きく変わったことといえば、食事の風景です。よりあいの昼食は、職員もお年寄りと一緒に食べていました。マスクを外さないといけないため、職員はお年寄りから少し離れ、黙々と食べることになりました。会話もなく、静かな食卓。「楽しくないな」「寂しいな」と改めて、共に食卓を囲み、「美味しいね」と言いながらの食事は大切だと感じることになりました。

コロナ禍でも変わらないといえ、お年寄りの皆さんです。世間の騒がしさも

『今』を生きている皆さんには、関係ないのかもしれないね。マスクも気づけば

どこへやら…です。大きな声で歌い、笑い、ドライブに出かけ、ここには変わらない日常があります。コロナの感染者数も増えてきていますが、私たちはこの日常が続く様に支援していきたいと思えます。

2020年11月、宅老所よりあいは開所30年目を迎えました。

当時92歳の大場さんの在宅生活を支えていた女性3人が、大場さんの出かける場所（地域とのつながり）を作るためにスタートし、多くの方々に支援して頂きながら、お年寄りの生活を支えてきました。これからも『ひとりの必要から動く』という原点を忘れずに、目の前のお年寄りに向き合い、振り回されながら、制度の有無に囚われることなく柔軟な支援を積み重ねていきたいと思えます。

今年もどうぞよろしくお願いいたします。



100歳から学ぶ

第2宅老所よりあい

緒方 眞弘

昨年は、新型コロナウイルスにより様々な自由が制限されました。

第2よりあいを支えてくださっている地域の方々も年齢を重ねておられます。それに伴って相談も増えてきました。関係者と共に支え合えるように取り組んだ1年でした。

ミズエさんは独り暮らしが心配されるお年寄りのひとりです。体調を崩し入院され、2か月持たず良いといわれる状態でしたが、コロナ禍での転院を望まれず、100歳の誕生日に第2よりあいに来られました。

「私、もうダメだつて覚悟をしていたのよ、本当に救ってもらいました。私は、もうここで看取ってもらって決めているから、予約しています。」

冗談とも本気とも取れる飛び切りの100歳の笑顔に、嬉しいような、困るような。

「はあ、良いなあ」

ほかほかする午後。窓辺でひとり、椅子に座り外を眺めながら目を細められているときがありました。

「何が良いんですか？」と尋ねました。

「ここにはね、自由があるのでしよう？それから、共有があるって言うのかなあ。」

何気ない会話でしたが、深く印象に残りました。

みんなと食卓を囲み、困ったときには手を借りて、ひとりの時間も持てる。

特別なことは何も無く、本人の望むことをその時に出来る様にする。

ミズエさんは元気になるにつれ、新しい出会いと繋がりを自ら作られました。今は、再び在宅生活へ戻ることを目標とされています。

100歳であっても、自分の人生は自分で決めていける。ミズエさんはそれを教えてくれます。

まだまだお年寄りにとって不自由な状況は続きますが、お年寄りの望む暮らしを支援していけるよう努めます。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。



編集後記

各事業所の責任者の「思うところ」を新年のご挨拶に代えさせていただきました。先行きが不透明だからこそ、「今」を大切に。意図せずそのような内容になりました。本年もどうぞよろしくお願いいたします。村瀬孝生